スタッフルーム

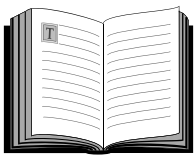
コルク抜きに会いに

竹内（たけうち）　美樹（みき）
（日吉メディアセンター）

コルク抜きといっても，ワインの話ではない。

ジャン・コクトーの愛猫 tire-bouchon だ。犬と猫のどちらがいいと聞かれたら私は犬派である。ただ，シャム猫を気恥ずかしげに胸に抱いたジャン・コクトーの写真は一目で気に入った。その猫ティル・ブションは「コルク抜き」という一風変わった名前のせいで，妙に気になる存在だった。

文系女子なら中高時代あたりに一度はかかるコクトー病から私はいまだに抜けられないらしく，詩人のお墓参りをしたくなった。なんでもコクトーが葬られている小さな礼拝堂の中には，彼の描いたおとぼけ顔の猫がいるらしい。これは見ないと！と思っているうちに，私の中で壁画のおかしな猫と「コルク抜き」が重なってしまい，同一人物ならぬ同一猫と化していたらしい。



コクトーが眠るミィ・ラ・フォレの町はパリから南に2時間ほど郊外電車に乗ったメッスという町からさらに車で7km。電車の乗り継ぎに四苦八苦しつつもやっとの事でメッス到着。公共交通機関がないと聞いていたのでタクシーを拾うつもりだったのだが，タクシーどころか無人駅とその周辺，人っ子一人いない荒地！？都会でさえ深夜なら常識だが，タクシーは予約制。だがタクシー会社までもが夏は長期休業とは予想だにしなかった。さすがヴァカンスが法定されている国，フランス恐るべしである。

幸い駅前の小さな宿？のおじさんがミィまで車で乗せてくれる事になった。（奥さんらしきおばさんによる命令）おじさんと大きな犬が前に乗り，日本人2人が後部座席。普通なら「変な所に連れて行かれて恐喝？うぎゃ――っ！」という恐怖にさいなまれてもおかしくないシチュエーションだが，特に恐ろしい出来事は起こらず，10分ほどで小さな町の広場に着いた。「○×△！☆○！」何を言っているのかさっぱり謎だが，電話番号を書いた紙を渡され，公衆電話と時計を指す仕草で，どうも迎えに来てやると言われているらしいと推察。ありがとう，おじさん（マトモに電話できるか謎だけど）！　実際，この界隈はヴァカンス真っ最中のせいか人通りもほぼゼロ。あの親切な夫婦がいなかったら，コクトーの町にはたどり着くことが出来なかっただろう。旅行しているとよく人の親切に救われる。某国でも到着直後の深夜，さびれた郊外で一人放り出された時は，どうしたものかと時差ぼけしつつ途方に暮れたが，たまたま通った子連れの女性の助けで事なきを得た。こういう経験を重ねるにつれ，情けは人のためならず，そんな事を思う次第である。

12世紀に遡る歴史をもつミィ・ラ・フォレは小さな小さな町だ。その外れに，詩人が眠るサン・ブレーズ・デ・サンプル礼拝堂はひっそりと佇んでいた。装飾も全てコクトーの手になる建物は思いのほか簡素で仄暗い。青い小さなステンドグラス越しに差し込む光の中，低いモノローグが流れている。真っ先にあの猫―私の「コルク抜き」―を探す。コクトーご本尊が後回し状態だがこの際気にしない（？）。その猫は何かもの問いたげな顔で，きょとんと巨大な薬草の絵を見上げていた。なんでもこの猫は悪魔の象徴とも聞くのだが…使い魔にしてはかなりカワイイ。ここはやはり日本人，やっと会えたおとぼけ猫の写真撮影である。

華やかな人生を送ったコクトーだが，晩年はこの小さな町で本物の「コルク抜き」と簡素に暮らしたそうだ。といっても，以前写真で見た玄関だけでも我が住まいと同じくらいの広さ。よく考えるとかなり切ないものが。コクトーの私邸は見学できないと知らされてがっかりするも，とりあえず門扉にはちょっとだけこっそりよじ登るマネを。（捕まるぞ）

広場がやや夕日の色に染まる頃，あのおじさんが車で迎えに来てくれた。また大きな犬と一緒にメッスの駅まで数分間の旅。電話では勿論，対面でもおじさんとのマトモな会話はほとんど成立しなかったが，感謝の念は伝わったと今も信じている。

列車がパリに近づくにつれ，ごみごみと殺伐とした風景が外を走っていく。ただ，さっき見た「私はあなた方と共に」というコクトーの墓碑銘や壁画の愛らしい猫，そしてあの夫婦を思い出し，ふと安らいだ気分になる。